

洋書紹介

Just so Stories

by

Rudyard Kipling

Doubleday & Company, Inc.

Garden City New York

Copyright 1902, 1907

江波 諱子

古い、古い本を一冊とりあげてみました。黄ばんだその本の扉を開きますと、

——クリア湖でこの本を

さがし出したジュンコへ ハリスパバ・ママより——

とあります。

なぜ、こんなに古い本をハリス教授が、カナダの湖にある小屋に持っていらしたのか私にはよくわかりません。ただ覚えておりますのは、果てしない原始林に囲まれたクリア湖で休暇を過ごしたある夏の夜、ガスランプを灯もして、うす暗い小屋で教授が読んで下さったこの物語を一度で私は好きになってしまったということです。

「Just so Stories」を日本語的に表現してみますと、「つまりそういうわけなのです」、とか、「そんなわけお話集」とでもなりましょうか。けれど私は、どちらかといいますと、この本に、日本語で「古い、古いお話集」といった題をつけたような気がいたします。

この本の中には、十二のお話があります。十二のいずれも大変古くて、おもしろいのですが、同時に、どのお話も大変日本語に訳しにくい共通点をもっています。今回はこの中から二つのお話をご紹介します。Kipling の作品の特徴と、子どもにとって真に「古い」おもしろいとは何かということを共に考えすすめてみたいと思います。

おはなし 1

ラクダはどうしてこぶがあるのでしょうか

歴史が始まったころ、世界がまだすべて新しく、動物たちがちょうど人間のために働き始めたころでした。一匹のラクダがいました。ラクダは、ものすごい砂漠のまん中に住んでいました。というのは、彼は働きたくなかったからです。その上ラクダはほえる獣でした。彼は棒や、とげや、ぎょりゅうや、やま人参や、いばらを食べていました。誰かが彼に話しかけると、彼は「フン」^{フン}とたदैって他に何もいませんでした。月曜日の朝、馬が背中^{うで}に鞍^{くら}をのせ、口にくつわをくわえてラクダの所へやって来ました。そしていいました。「ラクダさん、ねえラクダさん、出ていらっしやい。そして私たちのように歩きなさいよ」けれどラクダは「フン」といっただけです。馬はいってしまい、このことを人間に伝えました。まもなく犬が口に棒をくわえてやって来ました。そしてラクダにいうのです。「ラクダさん、ねえラクダさん、出ていらっしやい。そして私たちのように運びなさいよ」けれどラクダは「フン」といっただけです。犬はいってしまい、このことを人間に伝えました。やがて、牡牛が首にくびきをつけて私たちのように耕しなさいよというのですが、やはりラクダは「フ

ン」というばかりです。馬と犬と牡牛は三日目の夕方、人間に呼ばれ「おまえたちにはすまないが、あの『フン』というやつは働くことができないらしいから、お前たちに二倍働いてもらいたい」といわれます。けれど三匹はそれではすまず、世界はまだ新しく、何もないのだから、どうしてもラクダも働くかを相談し始めました。そこへラクダがやま人参をくわえてやって来ました。ラクダは三匹をみて笑って、「フン」といって去って行きました。まもなくしますと砂漠のふしぎなデジンさまが、ちりの煙にまかれながらやって来ました。三匹はラクダのことをデジンさまに相談しました。デジンさまはラクダが月曜日の朝から何の仕事もしていないことを聞き驚いてしまいます。デジンさまは、「ラクダは他に何か知っているか」と三匹に尋ねますと、「ただ、フンというばかりです」と三匹は答えます。それをきくと、デジンさまは、ほこりのマントに身をつつんで、ものすごい勢いで砂漠を横切^{よこ}っていきました。デジンさまはラクダをみつ^みつけ、「お前は世界がこんなに新しい時に、未だ何も仕事をしていないときいたがどういうことなのか」と尋ねました。ラクダは相変らず「フン」といっただけでしたので、デジンさまは、あごに手をあててラクダにおしおきを考えます。ラクダは相変らず「フン」といっています。「わしがおまえだったらそんなことは二度としない。わ

しはお前に働いてもらいたい」とデジンさまがいうと、やはりラクダは「フン」といいました。

しかし彼がそれをいうやいなや、ラクダの背中はずーとふくれあがりました。デジンさまはいいました。「わかったか。それはおまえが働かないので自からつくった「フン」(英語ではラクダの背中のことをつんといいます)だ、今日は木曜日で、おまえは月曜日以来何も働いていない。さあ、これから働きに行くのだ」ラクダは尋ねます。「どうしたらよいのです?」デジンさまはいいました。「その背中のこぶでわかるだろう。おまえは丸三日も無駄にしたのだから、今日から三日間、何にも食べないで働かねばならない。おまえはそのフン(こぶ)で生きられるのだから。さあ、砂漠を出て三匹の所へ行きなさい。そしてそのフンをつつしみなさい」

こうして、この日からラクダはいつも「フン」(つまり今ではラクダの背中のこぶのことをさし、ラクダの感情を害しないようにしています)を体につけているのです。しかしラクダはまだ決して、世界の初めに彼が失った三日間をとりもどしておりません。

おはなし 2

象のこども

まだ象が長いお鼻をもっていなかったころ、好奇心の強い一匹の象の子どもがアフリカに住んでいました。おばさんのだまや、おじさんのキリン、その他大勢のおじさん、おばさん、兄弟に、自分が見るもの、きくもの、におうもの、感じるもの、触れるもの何でも、かんでも尋ねました。そしては、みんなに叱られていました。

ある日のこと、「わには夕食に何を食べるの?」と聞いて、また叱られてしまいました。すると、コロコロ鳥がグレイト・グレイ・グリーン・グリーン・リンボー・リンボー川に行つて捜してみよういいました。象の子どもは、家族に別れを告げてアフリカ大陸を渡り、一人旅を続けます。川の堤でにしゃべりに出会いました。象の子どもは、しばらくしてやつとのことで、わにに会うことができました。象の子どもはわにに尋ねました。「夕食に何を食べるの?」すると、わには象の子どもにおそいかかって来ました。そこへ、さっきのにしゃべりが現われて、「出来る限り、体をひっぱりなさい。そうしないとわにに川の中へひっぱりこまれてしまうぞ」と教えてくれました。象の子どもは、力のあるっ

たけひつぱりました。すると鼻が次第にのびてくるではありませんせんか。にしきへびも手伝ってくれたので、わによりもふたりの方が強く、とうとう勝つてしまいました。けれど、象の鼻はすつかりのびてしまいました。象の子どもは、グレイト・グレイ・グリーン・グリーン・リンポーポー川に鼻をひやして縮むのを待ちます。けれどそのうちに、長い鼻はいろいろな便利であることに気づきます。飛んで来て刺すあぶを追いはらえるし、草むらから草をとって、きれいに泥をはたきおとすこともできます。それから、木の上の果物も食べられるし、それにその長い鼻で、今まで叱られてばかりいた家族を今度は反対に叱ることもできると思いました。

象の子どもは、長い鼻を短かくするのをあきらめて、アフリカ大陸を渡り家族のもとへ帰って来ました。そして、長い鼻がどんなに便利かみんなに見せてやり、長い鼻でいばって見せました。象の家族は、すっかり長い鼻が気に入る、ひとり、ひとりグレイト・グレイ・グリーン・グリーン・リンポーポー川へ行つて、わにから長い鼻をいただきました。それ以来、誰も叱る人はいなくなり、今、皆さんが知っている象は、みんな鼻が長いということです。

以上、二つのおはなしをご紹介しますが、このほかに、

「くじらはどうしてあのようなのどを持つようになったか」、「ひょうはどうして体に点々があるのか」、「最初の文字はどうして書かれたか」、「アルファベットはどうしてつくられたか」などが、いわゆる「なぜなぜ教室」で答えるような科学的な答えでは決してなく、非常にダイナミックで空想的な内容ではなしが進められています。ひとつ、ひとつのおはなしを読み終えるごとに、思わずにっこりとしてしまい、これまで自分をとりまいていた限られた空間的、時間的世界のわくがくずれ、どこか広く遠い世界に漂い始めた感さえしてきます。子どもは常に、現実と空想の世界をさまよっており、ある時は非常に科学的、認識的な知識を与えることも必要です。しかし、先にあげましたような種類の疑問を子どもが抱いた時、子どもは一体、どんな答えを求めているのでしょうか。それは、子ども自身にもわからないかもしれません。けれど、いずれにしてもその子どもが抱いた未知の事象に対する関心の大きさに対応しうる内容をもつ答えを与えてあげることには大切だと思えるのです。そのような意味で、キップリングの作品は、子どもが期待していた以上のおもしろさをもっているように思えます。そして、子どもの心の中に無意識のうちに潜んでいる本当のおもしろさへの憧れは、彼の作品によってある程度満たされるのではないのでしょうか。

(十文字学園女子短期大学)